漢代宴席文芸に流れる基盤的感情
―曹植「鼙舞歌」を通して―

柳川順子

漢代の宴席で繰り広げられた様々な芸能の中には、民間文芸に出自を持つものが少なくない。そうした漢代宴席文芸のひとつに「鼙舞歌」がある。現在それは、「関東有賢女」「章和二年中」「楽久長」「四方皇」「殿前生桂樹」という五篇の題目が伝わるのみではあるが、これに基づいて作られた曹植「鼙舞歌」五篇を通して、この漢代宴席文芸の一端を推し測ることができる。というのは、曹植は軟禁同然の境遇にあったがゆえに、自由な自己表現を自ら封じ、前代の歌辞を忠実に再現しようとする姿勢を取ったからである。

本発表では、曹植の「鼙舞歌」五篇のうち、漢代の「章和二年中」に基づく「聖皇篇」、「殿前生桂樹」に基づく「霊芝篇」、「関東有賢女」に基づく「精微篇」を取り上げて、その基底に息づく当代の人々の基盤的感情を探りたい。「聖皇篇」は、王朝の運営体制に関わる史実を詠じながらも、前面に打ち出されるのは骨肉の情、離別の悲哀である。これは、漢代の宴席で生成展開を遂げた五言詩とも根底を同じくすると見られよう。「霊芝篇」が詠ずる孝子たちの逸話は、正統的な史書には記述が乏しい一方、説話や非正統的な史書、及び漢代画像石や唐代の変文との間には強いつながりが見える。「精微篇」が詠ずる父親を救った娘たちの故事も、いわば表座敷の書物では等閑視されるものの、説話を多く記す史書や民間歌謡に接近する作品との間には顕著な結びつきが認められる。

これらの曹植作品から推し測られる漢代「鼙舞歌」は、深く民間に根を張り、当時の宴席で広範な人々に共有されていた感情を私たちに開いて見せてくれる。その中には、漢代に特有の情感もあれば、遠く後代にまで伝播していく感慨もありそうだ。そうした複数の要素を併せ持つ「鼙舞歌」を、他ジャンルの文芸との関連性にも言及しながら、中国文学における感情史構築のための一素材として読み解きたい。